

山王遺跡第3地点の調査成果

—小さな調査の積み重ねを繋ぐ—

1. はじめに (第1・2図)

山王遺跡第3地点は、八幡東区山王二丁目に所在し、標高約5～6mに位置する遺跡です。これまで2回の発掘調査が行われており、今回の調査で3回目となります。

今回の調査は180㎡と小さな範囲ですが、古代から中世にかけての遺物、杭列と石材集積遺構が確認されています。

2. 遺物包含層と杭列と石材集積 (第2・3・4図)

第3地点の調査では、地上から基盤面まで概ね9～16層の堆積層を確認し、その内3層(6～8層)が土器等を含む遺物包含層(調査区よりも標高の高い場所から、遺物が落ちてきたり、流れたりして堆積した層)でした。また、調査区の南西側では一列に並んだ杭列を2列、北東側では石材を集積した遺構が確認されました。

遺物包含層最下層8層(黒っぽい茶色粘土層)からは、中国産の白磁(11世紀後半～12世紀前半頃)や、土師器碗・坏(10～11世紀代)が少量出土していることから、8層の堆積時期は12世紀代(平安時代)と推定されます。

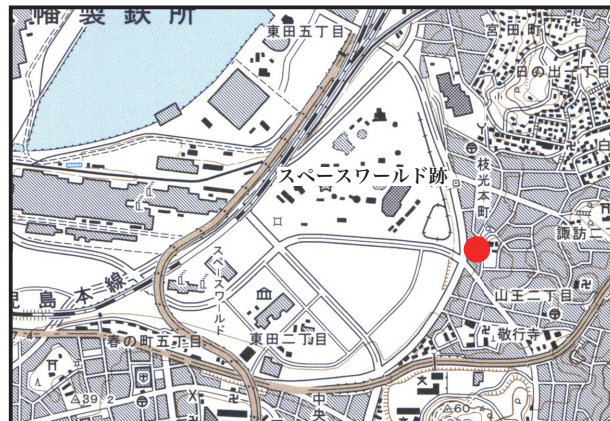
7層(暗い青色粘土層)からは、中国景德鎮窯産の青白磁梅瓶(14世紀代)や白磁碗(13世紀後半～14世紀代)、土師器坏・小皿、大量の炉壁片等が出土しており、遺物量から見て遺跡が最も栄えた時期と考えられ、近くに有力な武士等が居を構えていた可能性があります。これらの出土遺物から、7層の堆積時期は14世紀前後(鎌倉・室町時代)と推定されます。

6層(茶色粘土層)からは、備前産の播鉢(15世紀後半～16世紀)や簀、大阪産の瓦器碗(11～12世紀代の交易を示す)が、直上の表土層から17世紀前半の肥前産陶器碗が出土していることから、15～16世紀頃の堆積と推定されます。

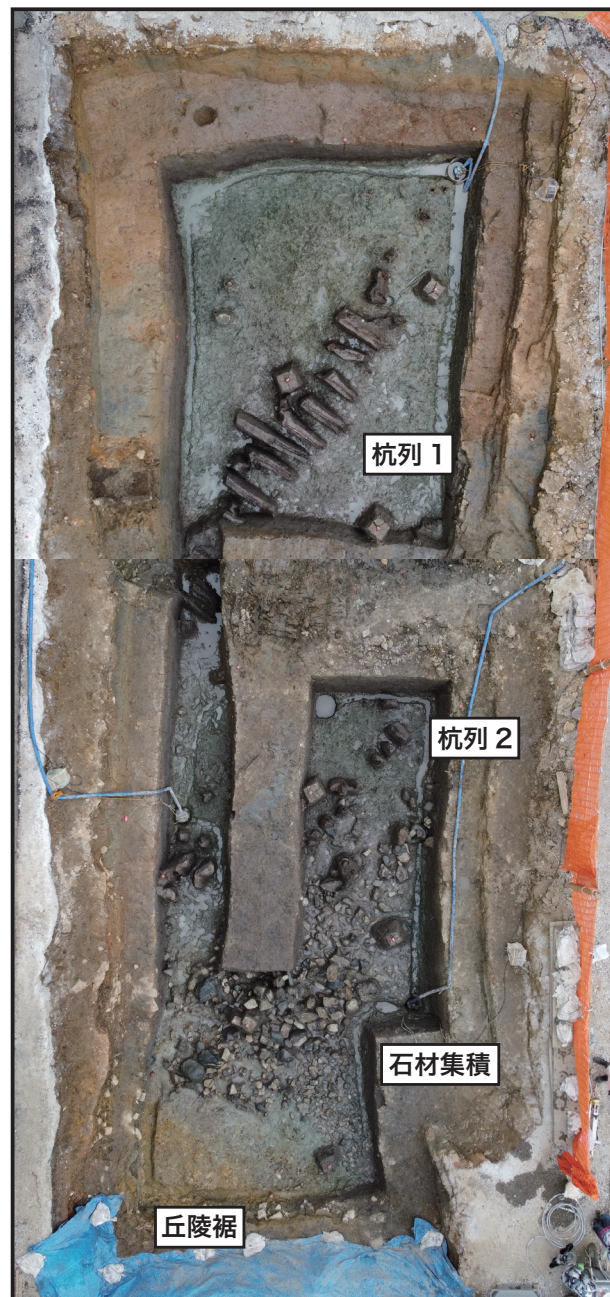
杭列は第2図の上側に杭列1、そのやや下方に杭列2が検出され、杭列1と2の間は約3.0mを測ります。杭は直径約10cm×長さ約1m前後の自然木の先端を加工したものを打ち込んでいました。それぞれの杭列が並行していることから、同時期に設置された可能性が考えられます。また、杭列2の下側には石材が集積された部分が検出されました。この石材集積の下方に黄色の地面が見えます。これは丘陵の裾部と考えられます。

石材集積遺構はこの丘陵裾部より約7.5mの長さで検出されました。この石材集積も、杭列に並行するように見えること、杭列側には石材が全く無いことなどから、杭列と石材集積とは何らかの関連があるものと思われます。そして、これらの遺構は共に7層の堆積過程に含まれることから、その構築時期は幅を見て14～15世紀と推定されます。

以上のように、山王遺跡第3地点の調査成果からは、平安時代の遺物を含む干潟状の湿地環境が、鎌倉・室町時代まで続き、室町時代頃に杭列や石材集積等の構造物を丘陵



第1図 山王遺跡第3地点 位置図 (1/25,000)



第2図 山王遺跡第3地点の全景写真 (下が北東) 上側に斜め方向の杭列・下側に石材集積

裾部から構築したものと考えられます。それではこの遺構群はなぜこの場所に構築されたのでしょうか。

3. これまでの調査成果を総合^{そうごう}して分かること

ここからは今回の調査から分かったことを、これまでの調査成果と合わせて考えていきたいと思います。

第5図は第1・第2地点と第3地点の調査位置を合成したものです。これを見ると、山王遺跡全体が1つの谷地であることが分かり、標高の高い丘陵部分が茶色の地面で、低地部分が暗い青色の土であることが確認できます。また、この谷地が第3地点に向かって延びていること、谷地の最も低い部分に第3地点が位置していることが分かります。第2地点の建物跡などの位置関係を元に、標高の高い丘陵部分と低地部分を推定して色分けによる旧地形^{きゅうちけい}の復元をしています。

ここで改めて第3地点の杭列や、石材集積遺構^{ふさ}の位置を確認すると、これらの遺構群は谷地を塞ぐように構築されているように見えます。また、第3地点と同様に、第1・第2地点で確認されている低地に堆積^{きんじ}した干潟^{かんせつ}状の土に含まれる遺物は、第3地点の遺物の年代と近似しています。

以上の状況から、第3地点で検出した杭列や石材集積は、「14～15世紀に谷地を陸地化^{りくちか}・利用するために構築した堤状^{つつみじょう}の遺構ではないか」という仮説^{かせつ}が立てられます。また、もう1つ、比較^{ひかく}をして分かったことは、第1・2地点で大量に出土した製塩土器^{せいえんどうき}（奈良・平安時代の塩を作るための土器）が、第3地点では全く出土していないことです。このような特定遺物^{うむ}の有無なども遺跡^{いんし}を理解する上で重要な事実となります。今回立てた仮説の検証や新たな課題は、今後の発掘調査や研究により解明されることでしょう。

4. おわりに

－小さな調査区の意義と調査の積み重ねを繋ぐ－

山王遺跡第3地点の調査は、中世の低地開発に関連すると思われる杭列や石材集積が確認されました。このような推定は、これまでの調査成果を総合^{ていごう}することで生まれたものです。

このように、たとえ小さな調査区であっても発掘調査を積み重ね・繋ぐことによって、遺跡の理解は格段に進み、地域の歴史的変遷^{れきしきてきへんせん}をより深く理解することができます。

そして、考古学の力によって14～15世紀という年代的な中心が把握できたことによって、山王地域を含む戸畑や八幡地域における同時代の歴史と関連付けることが可能となります。

※この見解は、令和5年4月時点のものであり、今後変わる可能性があります。

埋 蔵 文 化 財 通 信

埋蔵文化財調査室では、令和5年度にも発掘調査が予定されています。

また、最新の発掘情報もホームページで公開しています。イベント情報なども随時公開していますので、是非ご覧下さい。

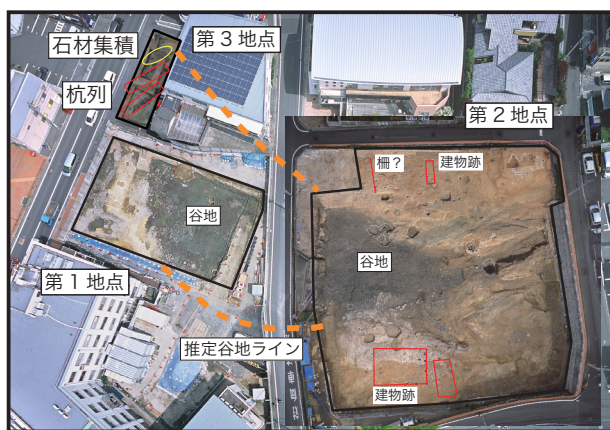
なお、イベント情報は、市政だよりでもお知らせしております。合わせてご利用下さい。



第3図 杭列 検出状況（北東から）



第4図 石材集積遺構 検出状況（北西から）



第5図 第1～3地点の合成写真

茶色：丘陵部分 暗い青色：谷地部分

公益財団法人北九州市芸術文化振興財団

埋蔵文化財調査室

〒803-0816 北九州市小倉北区金田一丁目1-3

TEL (093)582-0941 FAX (093)582-8970

北九州市市民文化スポーツ局文化企画課

〒803-8501 北九州市小倉北区城内1-1

TEL (093)582-2391 FAX (093)581-5755

発行日 令和5年4月18日

ホームページアドレスURL↓

<https://www.kicpac.org/maibun/index.html> 検索